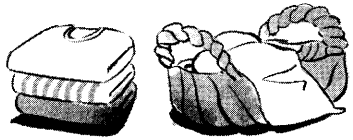
宮坂静生
推薦

岳 6 月

夕ざくら第六感のにぶりをり　奥山源丘
飛花落花戦車驀進せし道よ　満田光生
桃花水仏顔なる牧の馬　窪田英治
花冷や剝製どれも賢者の目　久根美和子
海底の屍を知らで春の雲　百瀬石涛子
底雪崩毅然と大江健三郎　後藤行雄
大いなる涅槃図に行き暮るるかな　松本よし乃
粘りある春の夕日や七尾湾　丸山貴史
うりずんや鍾乳洞は神のごと　太田継子
どすどすと牛のごと生き風光る　倉科繁登
干されある笊の煩悩おぼろ月　北村宣枝
行く春や生きるは絶えず揺れ通し　柿谷有史
おぼろの夜納骨のごと窯詰めす　広枝千鶴子
重力を振り切るあそび揚雲雀　竹岡みち子

*

ロケットは自爆余儀なし三月の満月　諏訪坂恵子



春の蠅鞴に呑まれをりにけり　細川はじめ
波が岩攫つて行くよさくらの夜　田村道子
飽きたれば奔流に乗る春の鴨　上村敦子
初ざくら洗礼受けし子の熟寝　西川五月
プーチンが平に謝る万愚節　堤　保徳
ほちやほちやと過す晩年鳥雲に　海野良三
戦止めよ満天星躑躅の鈴鳴りやまず　小形信子
逝きし子はヤングケアラー野水仙　浅田美代子
黒田杏子の訃報や松の花の冷え　上江洲萬三郎
朝まだき黒子のやうな春の蠅　柴﨑美智子
菓子型にエッフェル塔や春夕べ　林　祥子

*

春の宵木々の間にニンフたち　高瀬かず枝
花種を蒔く時蹠柔らかし　飯森晴美
雨に濡れひとりひとりの桜かな　岡田ミヤコ
ぶらんこの降りかた恋の鎮めかた　菊池理津子

半世紀へ ―― 岳俳句六月 526

―同人集・岳集・青雲集から

宮坂静生

巻頭のことば　貴重な熱い二日間でした。「岳」創刊四十五周年記念大会に引き続き私の句碑建立除幕式典を挙行していただきました。この欄をお借りして、誌友の皆さんにこころからお礼を申し上げます。事務局長や編集長、事務局スタッフ、「岳」長野支部の方々、行事一切に関わる皆さんに感謝します。

「短詩型文学への期待」はロシアによるウクライナ侵略という社会不安を背景に、短歌・俳句の詩型がはらむ問題点について刺激的な問題提起があり、私にはドキドキするほど新しい考えが展開するような昂揚感がある。うれしいことだった。『俳句鑑賞1200句を楽しむ』（平凡社）を前著『俳句必携1000句を楽しむ』と同じ平凡社からお出しいただいた。編集一切を短期間に集中的におまとめくださった三沢秀次さんの知的感性の鋭さとバイタリティーに敬服している。

第六感のにぶりとは ―― 経験を積み重ねた果てのなげき

夕ざくら第六感のにぶりをり　奥山　源丘

「老い」とはこれかといっては身も蓋もないが、老いると閃きがなくなる。意外な連想がはたらかなくなる。夕方のさくらが放つ、ぼってりした気分に浸ると、穴に嵌ったように、それきりで思いが拡がらない。共感する。

飛花落花戦車驀進せし道よ　満田　光生

日本の光景か。いまウクライナの戦場が日夜テレビに映し出される。その惨状からわが安穏と見える国土もほんのしばらく前は花吹雪の中を戦車が驀進した戦場の道であった。記憶を現実に繋げる「飛花落花」を捉え、風雅を見直した句。

桃花水仏顔なる牧の馬　窪田　英治

桃が咲き出す頃の雪解水が滔々と流れる牧場風景。牧に放たれた馬の「仏顔」とは、幸せとも、老いて哀しいとも、のんびりした中に、現代社会の一面を思わせる点に注目した。勇猛果敢な馬の表情が消えてしまった牧の馬。

海底の屍を知らで春の雲　百瀬石涛子

海底には屍が累々。三・一一とも、第二次大戦の南方、例えばニューギニア辺の諸島の海底を想起してもいい。シベリア抑留三年の過酷な体験に耐えて生還した石涛子の目は複眼である。単眼しか持ち得ない者の薄い生存とは違う。作者九十八歳の現在、「春の雲」の安閑とした世相をなじる気持ではない、ときに己の身が「春の雲」ではないかと、死者を思い浮かべて内省した句と私は読んだ。

底雪崩毅然と大江健三郎　後藤　行雄

春先に多い、斜面の雪全体が雪崩れる現象。大江健三郎の死は自分にとっては「底雪崩」だった。全身が打たれたのである。「毅然と」は大江の出来ることはやり抜いた老衰死への生涯を讃えたものである。

大いなる涅槃図に行き暮るるかな　松本よし乃

大涅槃図に到達するまでに時間がかかるとは。これは人の行き着く象徴とも読める。「かな」があることで、寺の涅槃図を超えたわが生涯の涅槃図を想定することができよう。

粘りある春の夕日や七尾湾　丸山　貴史

バランスがいい句に感心した。内海の七尾湾の季節は春、それも夕日が行き渡る海の「粘りある」ところに着眼した捉え方が見事である。

うりずんや鍾乳洞は神のごと　太田　継子

春気潤う穀雨頃までの沖縄の鍾乳洞を神のようだとの着眼はなかなかだ。不思議な雰囲気が漂う。私もその頃の鍾乳洞へ入った体験をいい淀んでいただけに納得した。九十歳を越えて意欲横溢。句集『たまゆらの囀』上木以後、力が落ちない。

どすどすと牛のごと生き風光る　倉科　繁登

牛のように生きたい願望を持つ人は多いが、「どすどす」が面白い。「どすんどすん」では相撲取り。もう少し軽い。

干されある笊の煩悩おぼろ月　北村　宣枝

不思議な想念の作。「笊の煩悩」が人間の戯画。見事である。時はおぼろ月の下であれば、からだから水分が抜けて老いの意識もきざすころ。えいままよ、と開き直りも魅力的。

行く春や生きるは絶えず揺れ通し　柿谷　有史

人が生きるとはまさに「揺れ動し」。ああでもない、こうでもないと悩むことがすべて。春が過ぎてゆく。来年の春は来るであろうか。青春の哀歓を秘めて、いよいよ正念場を迎える。

おぼろの夜納骨のごと窯詰めす　広枝千鶴子

作者は陶芸家。春のおぼろ夜の窯詰めの喩えが「納骨」とはぎくりと響く。骨を納めた壺を納骨堂に収める、そのさまを想像したものか。火焔に任せ祈るような気持の譬喩であろう。出来上がりの作品が「骨」とも思われるところが凄い。

今月の秀句

花冷や剝製どれも賢者の目　久根美和子

鳥類か獣類か。剝製になっていかにも賢そう。生きているときの生臭さが消えて「賢者」とは一面の真理を突いている。花冷が一層賢さを増長させ、哀しい。手応えがある、考えさせる秀句である。

重力を振り切るあそび揚雲雀　竹岡みち子

虚空に舞い上がる雲雀の楽しさを重力に抗いながらの「遊び」とみたもの。物理学者よりも生理学者の視点か。

雪嶺集・前山集から推薦候補作をあげる。

雛壇を見上ぐる猫に殺気かな　松澤　睦司

痛みとは命の証鳥曇　大西　健文

パロディーがどこまで届くか―極悪人の悔悛はあり得るか

プーチンが平に謝る万愚節　堤　保徳

人がいい保徳さんらしい万愚節詠。頭を丸めて隠遁者になりロシヤ正教会へでも拾ってもらうというのであろうか。間違った戦いのために命を落とした人をどう救済するか。ロシアに連れ去った子供たちを直ちに返してほしい。いずれにしても、プーチンの引き際を考えないとこの戦争は止む気配がない。一人殺せば殺人、百万人殺めれば英雄。この論理はおかしいといいながら、現代の正義はつねにあやふやである。

春の蠅鞴に呑まれをりにけり　細川はじめ

生まれたばかりの弱弱しい蠅が鞴に呑まれる。鍛冶屋の鞴への嘱目であろう。ユーモラスな着眼に秀でた作者。

波が岩攫つて行くよさくらの夜　田村　道子

陸は陶然とした夜桜気分でも、礁は波高し。次々と波が岩を呑み込んでいく。平凡な花鳥諷詠ではない。不思議な危機感を孕んだ開かれた詩人の眼がある。

飽きたれば奔流に乗る春の鴨　上村　敦子

「落椿われならば急流へ落つ」（鷹羽狩行）の見方が微妙に無意識のどこかにあったか。句作にはそれくらいの淡い記憶がないとむしろいい作品はできない。私は、俳句鑑賞学を提唱している。問題作を読んで、類想と独自さとのぎりぎりの違いを見分ける勘を身に付けることが大事だと考える。

初ざくら洗礼受けし子の熟寝　西川　五月

初ざくらと洗礼受けし子との取り合せに緊張感があり、清新である。信仰への敬虔さに、無信仰の私でも心打たれる。

今月の秀句

ロケットは自爆余儀なし三月の満月　諏訪坂恵子

アメリカ先住民族には満月に関する特有の呼称がある。「三月の満月」（Worm Moon）は芋虫月。日本でいう啓蟄（地虫出づ）。今年は三月七日がそれにあたった。月は地中のみみずや芋虫の目覚めを促す。月をめぐる素朴な呼称をつけ、月への想像を楽しんできたが、折から、日本の民間企業が揚げた月探索のロケットは自爆して月まで届かなかった。それは月の方で受け付けなかったのではないか。月まで金儲けの対象にしようという商業主義への批判が籠められ、意欲的な作。

ほちやほちやと過す晩年鳥雲に　海野　良三

北へ帰る鳥を仰ぎ、「ほちやほちやと過す晩年」とは。気兼ねなく気張らないで好きなようにくらいか。音感の円やかさから庶民的な親しさがある。

戦止めよ満天星躑躅の鈴鳴りやまず　小形　信子

生垣の満天星躑躅の鈴が風に鳴る。静かに鳴り続ける。「戦止めよ」「戦止めよ」と響く。いつまでも響く。

逝きし子はヤングケアラー野水仙　浅田美代子

子どもが父母の介護をし、家事までこなす。学校へは行けない。賢い子だが疲れ果てて自ら死を選ぶことも。「ヤングケアラー」は身につまされる現実。野水仙が切ない。

黒田杏子の訃報や松の花の冷え　上江洲萬三郎

黒杏さんは三月十三日逝去、八十四歳。伸びやかさ、意志の強さは松の花であった。松の花冷えへの気付きに感心した。嗚呼、嘆息。

朝まだき黒子のやうな春の蠅　柴崎美智子

春の早朝に蠅が誕生。「黒子」の密やかさの気付きが鋭い。

菓子型にエッフェル塔や春夕べ　林　祥子

菓子の型にパリのエッフェル塔が使われている。春の夕べだけに、こんな時にパリへ行きたい。春愁めいた旅情しきり。

青雲集

春の宵木々の間に間にニンフたち　高瀬かず枝

ギリシャ神話の「ニンフ」（妖精）が春宵一刻のよき時に木から木へ戯れて舞うという。地中海ともわが極東日本の日光あたりの光景とも想像される。私は西脇順三郎の詩集を読み飛ばすような妖しさに嬉しくなる。情感が明るい。

花種を蒔く時蹠柔らかし　飯森　晴美

弾んでいる。花開く時を思えばからだ全身が柔軟に熱くなる。前頭葉が足裏（蹠）までほっほっとさせる。素朴な句。

雨に濡れひとりひとりの桜かな　岡田ミヤコ

雨に濡れながら、桜好きなのであろう。桜はひとりひとりが味わうもの。嫌い好きと呟きながら。群れない。孤独か。

ぶらんこの降りかた恋の鎮めかた　菊池理津子

ぶらんこを漕ぎながら恋に燃えるのは危ない。セーブが利かない。ぶらんこはしっかり止めて降りましょう。恋は地上に足を付けると、自然に鎮まります。掲句の本心は恋を鎮めたくないのではありませんか。ぶらんこに乗っていたい。

岳集・青雲集から推薦候補作をあげる。

高きより振る粗塩や夕桜　宮坂やよい

あたたかや魚が身をうつ水の音　塩川　昭子

雪解雫止むやしづけさあたらしき　小熊　里利

花満てり幹に微熱の脈々と　池田美津子

夕影のサボテンの丘クルスめき　藤森　岳仁

つちふるや息継ぎ多き母の経　牧野眞知子

ハンブルグ市街地図貼り風光る　関　礼子